

# 桂 閑村（かつら・かんそん）

## 1、プロフィール

県新派俳会の先駆太平会に参加、青森での記者時代には木村横斜をめぐる諸俳会で活躍。大正末年から松濤社・群星社・東奥俳壇などの選者となり、県俳壇に重きをなした。

<生没>

1870(明治3)年3月7日 ～ 1945(昭和20)年10月28日

<青森との関わり>

弘前に生まれ、明治30年代青森で新聞記者、以後津軽地区の小林区に勤める。大正末から昭和初諸俳会の選者となる。

## 2、作家解説

本名修五郎。明治3年3月7日、理三郎の子として弘前に誕生。32年同地に佐藤紅緑の主喝で生まれ、木村横斜・古川天仙・渋谷四楽・矢田挿雲らを擁する新派俳団太平会に参加。勇勁・古雅な句風で生涯を一貫したあり方はこの時期に確立する。横斜が34年、彼が35年それぞれ青森の新聞社に入ったことが二人をより親密にした。同地の横斜を中心とする不来会の幹事、同会の烏鷺会への改称、東奥十句集の提唱など意欲的に活動。野辺地の俳会笹鳴の俳誌「菅菰(すがこも)」でも会員に名を連ね、その印刷所(青森)に近いことから校正にも従事。当時競合していた多くの新聞社と記者、それに前述の三俳会などが連携し県俳壇を形成、秋田の「俳星」と呼応していた。こうした動向の渦の中心にいたこの頃は、彼の前期の得意時代である。

しかし、この時代は37年青森を去ることによって休止符がうたれる。彼の周囲の勧めで試験を受け飯詰小林区森林主事となったからである。さらに花巻小林区に転じ、42年退職した。この時代以後10年間は、仲間からも奇異に見られている空白期間である。大正6年以後の数年間は、実は旧派の和歌、それも歌合せ形

式でさえ作っていたことが、弘前の新聞で確かめられる。これはかつて紅緑の離弘後は和歌を作ったという不確定情報の傍証ともなっている。復活は突然やって来た。10年地元の太平会復活、13年やはり地元で群星社ができるとそれらの選者、15年横斜没後の東奥俳壇選者、同年松濤社の選者とあいつぎ、県俳壇の重鎮となる。この現象は青森の俳友の勧めで青森に出、『横斜遺稿』編集に携わったことを一契機としていた。梅原薫子、藤原柯芳の企画で横斜墓碑の遺句の揮毫もした。彼のいる薫子宅は閑梅居と呼ばれ俳界の一中心となり若い俳人が育った。昭和3年樺太に移住、その後も東奥俳壇の選者であったことは募集句の送り先が真岡市栄町であることで分かる。

20年10月28日逝去、享年75歳。法名、桂月院蛙薨村居士。